

守屋洋著「貞観政要のリーダー学 - 守成は創業より難し - 」

プレジデント社 2005年12月2日刊を読む

貞観政要のリーダー学 - 守成は創業より難し -

1.(1)中国古典の大きな柱になっているのは、リーダー学である。ほとんどすべての古典が、さまざまな角度からこのテーマをとりあげている。

(2)これはある意味で当然であった。なにしろ中国古典のめぼしいものが出揃ったのは、二千年も前のことである。当時、こういうものを書いたり読んだりした人たちは、いずれも社会の指導層であって、「上に立つ者はどうあるべきか」は、彼らにとってきわめて切実な課題であった。だからその内容はいやでもリーダー学にならざるをえなかったのである。

2.(1)リーダー学の極北にあるのが帝王学である。

(2)帝王学となると、数ある中国古典のなかでも、おのずから絞られてくる。それとして読まれてきたのは二冊ということになるのか。

(3)一冊は『書経』という古典である。

これは中国古代の帝王と彼らを補佐した名臣たちの記録であって、古くは『尚書』、またはたんに『書』とも呼ばれていた。誰が書いたのかは明らかではないが、今から二千年以上も前、漢の時代にはすでに『易経』などととともに「五経」に加えられ、儒教の基本的な原典とされている。その内容は儒教の政治理念を説いたもので、儒教流政治学のテキストと言ってよいかもしれない。

ちなみに漢の高祖劉邦が帝王学のご進講を受けたとき、教材として使われたのがこの『書経』であった。近くは昭和天皇である。若い頃帝王学を学ばれたとき、やはりこの『書経』もテキストの一冊に加えられたという。

(4)さて、『書経』と並んで、帝王学の原点とされてきたもう一冊の古典が、これから紹介する『貞観政要』である。こちらのほうはずっと時代が下って、唐王朝の二代目太宗李世民(在位 626 - 649年)にまつわる話である。

唐の太宗李世民は、中国の長い歴史のなかでも、屈指の名君として知られている。治世二十四年、重臣たちの諫言に耳を傾けながら、常に緊張感をもって政治に取り組み、平和で安定した社会を築くことに成功したとされる。その治世は、後の人々から、太宗の年号をとって「貞観の治」と称えられてきた。

『貞観政要』は、太宗が死去してから五十年くらいたって、<sup>ごきょう</sup>呉兢という史家によってまとめられた。題名は、「貞観の治」をもたらした政治の要諦といった意味であることは言うまでもない。その内容は、太宗と彼を支えた重臣たちとの間でかわされた政治問答を中心に編まれており、それらの問答を通して、彼らの覚悟と真摯な姿勢があまさず説き明かされている。この『貞観政要』もまた後の心ある為政者に帝王学の教科書として読みつがれてきた。

日本の例をあげれば、たとえば北条政子である。「尼將軍」として北条氏による執権政治の基礎を固めたこの女性は、『貞観政要』を愛読し、わざわざ学者に命じて和訳させるほどの惚れ込みようであったという。

また、徳川三百年の基礎を固めた家康である。彼もまたこの書を愛好し、<sup>せいが</sup>藤原惺窩を招いて講義させたばかりでなく、足利学校に命じて出版させるなど、普及にもつとめている。その影響で、各藩の歴代藩主のなかにも、この書に親しんだ者が少なくないと聞く。

さらに、歴代天皇もこの書のご進講を受け、記録に見えるだけでも、その数は十人以上にのぼっている。たとえば明治天皇である。侍講の元田永孚<sup>ながさね</sup>のご進講を受け、この書に深い関心を寄せられたといわれる。

3.(1)いつの時代でも、トップやリーダーは重い責任を背負っており、与えられた職責を果たしていくためには、それなりの覚悟が求められるのである。そういう立場の人にとって、今でもこの書から学ぶべきことが少なくない。

(2)ただし、『貞観政要』は全十巻四十篇から成っている。かなり龐大であって、忙しい人が読み通すには無理がある。そこで本書では、さわりの部分を選んで私なりに編集し、あわせて、わかりやすい現代語訳と解説を付してみた。

(3)然るべき立場の人々に、広く読まれることを願っている。

#### [コメント]

守屋先生の「貞観政要」のリーダー学のはしがきからの引用。

これほどの本があるのに、社会のリーダーがあまり目にすることもなく、また、ほとんど読まれていないのは本当にもったいなく思う。

徳川家康はこの「貞観政要」を愛し、足利学校に命じて出版させ、江戸時代の基礎を築いたと考えられる。

創業と守成。明治維新を近代日本の第一創業期とすれば、戦後の日本は近代日本の第二創業期である。第一創業期は途中までうまくいったが、三代目が第二次世界大戦で国を亡ぼしてしまった。第二創業期も、GDP 世界第二位と途中までうまくいったが、三代目が様々な形で国を亡ぼしつつある。「貞観政要」を読み直し、守成の大切さを学びたい。

- 2010年4月12日 林明夫記 -